

震災とアイデンティティの継承：鈴木酒造店の試練の克服

落合 康裕（静岡県立大学大学院経営情報イノベーション研究科 教授）

藤原 健一（一般社団法人日本ファミリービジネスアドバイザー協会 執行役員）

1. 沿革

鈴木酒造店は、福島県双葉郡浪江町請戸（うけど）を発祥とする酒蔵である。創業当時の請戸は漁港、海運の港として知られ、太平洋廻りの海運の重要拠点として栄えていた場所である。同社は江戸出しの廻船問屋であった。江戸時代末期の天保年間（1830～1844年）に、相馬藩より濁酒製造を許されたことで、酒造りを始めた（鈴木酒造店 HP）。

酒蔵は海のすぐ近くという立地で、「日本で一番海に近い酒蔵」といわれ、主力銘柄の「磐城壽（いわきことぶき）」は、その名前のめでたさから、出港時の清め酒や大漁時の祝い酒として、古くから地元の人々に重宝されてきた。かつて漁師は、大漁の時に漁協組合から祝い酒が送られたことから、「大漁だったか」ではなく「酒になったか」と声を掛け合ったという。

2. 五代目当主・鈴木大介

現在の蔵元は、五代目の鈴木大介氏（以下、鈴木という）である。1999年（平成11年）に東京農業大学醸造科を卒業し、奈良県の酒蔵で修行をした後、鈴木酒造店に入社した。鈴木は入社当時、地元の人々からの鈴木酒造店への絶大な信頼を体感している。

この蔵の長男が作るなら間違いないと、すでにある信用をもとに、地元の人が味も見ずに買っ

てくれるんです。『磐城壽』の看板を継ぐということは半端じゃないなと思いました。

（出所）コクラバホームページ（2022）より引用の上、筆者一部加筆。

1999年度（平成11年）の製造量は300石だった。仕込みの工夫や契約農家の協力を得て、2010年度（平成22年）には500石まで製造数量を増やした。2011年（平成23年）の夏には、酒蔵を改装する計画であった。その矢先に、2011年（平成23年）3月11日、東日本大震災が発生した。

写真1 鈴木大介氏



（出所）同社より提供

3. 東日本大震災発生

請戸は海のそばにあったことから、地震に伴う津波の甚大な影響を受けた。鈴木酒造店の蔵、母屋、会社関係資料は、すべて流されてしまった。加えて、請戸は原発事故により全域に避難指示が出された。同じ東京農大醸造科卒の南部美人の久慈浩介（以下、久慈という）は、震災当時、東北新幹線の中にいたが、真っ先に脳裏によぎったのが、鈴木やその家族、従業員の安否であったという。この後、鈴木は東京農業大醸造科の繋がりに助けられることになる。鈴木は、故郷の浪江町請戸から 100km 以上離れた山形県米沢市に避難することができた。久慈は次のように語っている。

同じ農大の醸造学科の同級生で、山形の米沢市っていうところに、新藤酒造があるのですよ。雅山流というお酒を造っている新藤酒造の新藤社長が同級生なのです。

（出所）南部美人・久慈浩介氏インタビュー。

酒造会社にとって、米と水を育む土地は命の源である。鈴木は、鈴木酒造店の歴史を刻んできた浪江町から米沢市に避難した頃、正直、廃業も覚悟したという。しかし、浪江町の多くの避難民から、浪江の酒や磐城壽をつくってほしいという要

望が鈴木のもとに寄せられた。津波の犠牲となった浪江町の契約農家の葬儀に参列するため故郷まで戻ったとき、酒蔵を絶対に復活させると決意することになる。鈴木は次のように語っている。

もうお礼を言うことも叶わない人への恩は、酒でしか返せない。自分で酒を造ることができれば、地域そのものを残すことができる。亡くなった人たちの生きた証を残すためにも、絶対に復活させなければ。

（出所）ココラバホームページ（2022）より引用。

4. 異郷での酒造りの再開

しかし、創業来の土地を離れて、酒造りを再開することは容易ではなかった。酒造業は、新規参入が難しい業界である。環境が変わる、米や水といった原材料が変わる、作り手も変わる。前途多難な状況であったことは想像に難くなかった。

そのような中、鈴木は、奇跡的に震災の九か月後の 2011 年 11 月に、山形県の長井蔵で酒造りを再開することになる。

第一に、酒造りの DNA ともいえるべき鈴木酒造店が長年育んできた酵母が残っていたことである。震災後、福島県の工業試験場からの一本の電

写真 2 東日本大震災直後の様子



（出所）同社より提供

写真 3 津波被害後の様子



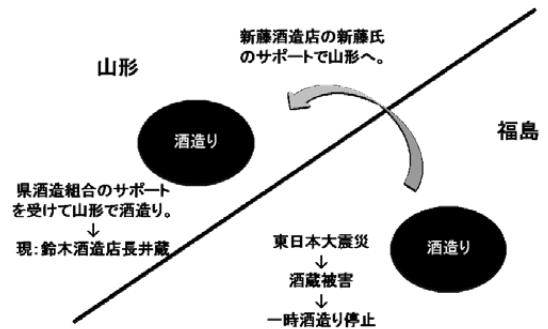
（出所）同社より提供

話があった。震災の2ヶ月前に公設試験研究機関の福島県ハイテクプラザに送っていた「山廃酒母」が見つかったのだ。伝統的な製法の酒母には、長い歳月を積み重ねてきた酵母が含まれている。この酵母があれば、他の地で酒造りをして浪江の酒を造ることができる。従来の鈴木酒造店がつくり上げてきた遺伝子を次の世代に繋げられる。鈴木は、この酵母を使い、「磐城壽」の製造を再開した。試験的に販売したが、その反響は大きく、すぐに完売となった。

第二に、異なる場所でも鈴木酒造店の味が醸せる可能性が出てきたことである。震災直後の5月、鈴木は会津のある酒蔵を借りて酒造りを行った。日本酒は菌の繊細な働きで醸される。製造する蔵や杜氏職人によって味が変わる。従来の浪江の蔵とまったく同じやり方で造ったにもかかわらず、出来上がった酒は会津の酒蔵の味になった。しかし、半年寝かせて再び試飲すると、鈴木酒造店の味に変わっていた。この経験は、「山廃酒母」が残っていたことも相まって、鈴木に創業の土地以外でも浪江の味を造れる可能性を示した。

第三に、山形県長井市にある東洋酒造株式会社（以下、東洋酒造）を引き継がないかという提案が舞い込んできたことである。東洋酒造は、1931年（昭和6年）に長井市の有力者達が出資し、設立された老舗の酒造メーカーであった。しかし、当時、業績不振で廃業を検討していた。先述の通り、酒造業界は新規参入が難しい。鈴木にとってこの話はまたとない機会であった。鈴木は、2011年（平成23年）10月に東洋酒造の全株式を取得した。同年12月には、「株式会社鈴木酒造店長井蔵」（以下、長井蔵）に名称を変更して再出発することになる。山形県酒造組合の仲野益美氏（出羽桜酒造）らのサポートも受けることができた。鈴木酒造店の主力銘柄である「磐城壽」はもちろん、東洋酒造の主力銘柄だった「一生幸福」、「甞

図1 山形県での酒造りの再開



（出所）久慈浩介氏へのインタビュー、及び鈴木酒造店 HP をもとに筆者作成。

る」の製造も再開することができた。このように、鈴木は鈴木酒造店の酒造りだけではなく、東洋酒造から引き継いだ銘柄の継承も担ったのである。鈴木は、危機にあった自分達を受け入れてくれた恩をいつまでも忘れないために、東洋酒造の酒を引き継いだのだという。

当初、鈴木は、福島の弟の酒蔵は、福島県外で酒造りをするに反対だった。しかし、鈴木と酒蔵は、相克を乗り越え、新たな土地での酒造りに邁進した。

3. コロナ禍と浪江蔵

長井蔵での酒造りが軌道に乗り出した頃、新たな経営危機が同社を襲うことになる。コロナ禍である。東日本大震災の時と同様、酒蔵だけではなく酒販店や飲食店などの取引先も甚大な影響を受けた。2020年（令和2年）の4月、5月の鈴木酒造店の売上高は、前年比で半分以下に激減してしまった。

鈴木は、新たな困難をもたらすコロナ禍に対応した。その一つが、YouTubeを活用したオンライン酒蔵見学会の企画である。地域の旅行会社と共同でオンライン酒蔵見学会などを開催し、鈴木酒造店の歴史やストーリーを発信した。

二つ目に、地域の酒造りの受託製造の取り組み

写真4 「なみえの技・なりわい館」



(出所) 同社より提供

である。2021年（令和3年）に、東日本大震災以来、久々に創業の地に鈴木酒造店が戻ってきた。地元浪江町の避難指示解除がなされた地域に「なみえの技・なりわい館」（以下、なりわい館）が完成した。鈴木酒造店は、その道の駅の中に設けられる酒蔵の管理者に鈴木酒造店が選ばれたのである。米を供給する地元の農家からも大きな期待が寄せられていた。鈴木は、浪江に蔵をもつことができ、再び酒造りができるようになった。ここに、現在の浪江蔵と長井蔵との2拠点体制が出来上がったのである。

鈴木は、コロナ禍にあって、浪江蔵を活用して今度は山形県や長井市での酒造りのサポートを行っている。この取り組みの背景に、10年前の東日本大震災の際、鈴木達を受け入れてくれた同地域への恩返しの意味が隠されていた。

4. 地元異業種との協働

鈴木酒造店と同様に、東日本大震災で地元地域でも活動ができなくなり、他の地域で事業継続を図った大堀相馬焼の松永窯がある。大堀相馬焼は、約300年以上の歴史を誇る。東日本大震災の後、同地域の窯元は大きな被害を受け、窯元の数が半減してしまった。残った窯元も周辺地域に移転して事業を継続した。松永窯の松永も、鈴木と同様に、元の地域にもう一度、大堀相馬焼を取り戻したいという気持ちを持っていた。

鈴木は、窯元とコラボレーションを行い、日本

酒の飲み比べイベントを開催した。また、道の駅のなりわい館では大堀相馬焼の器で日本酒を味わってもらふコーナーを設け、地場の窯業の復活にも努めている。鈴木は、酒造業と地元の窯業、漁業、農業などの様々な産業とのコラボレーションによって、地域の伝統を継承し、その取り組みを起爆剤に、地域発の新しい価値を提案しようとしている。

今後、本格的な人口減少社会を迎える日本において地域創生は喫緊の課題である。震災からの復興も含めて、鈴木酒造店の取り組みは我々に大きな示唆を与えてくれる。

【参考文献】

- 落合康裕（2021）「危機を乗り越える100年企業のつながり」100年経営研究機構年次総会資料。
- 株式会社鈴木酒造店ホームページ（アクセス日：2023年11月22日）
<http://iwakikotobuki-namie.com/>
- 食糧問題研究所編（2022）「震災という試練を乗り越え力強く歩む」『食糧ジャーナル』第47巻第3号、64-67頁。
- 湊文社編（2023）「魚料理別の専用酒で常磐漁師を応援」『アクアネット』第26巻第8号、12-16頁。
- 日本商工会議所編（2023）「長井で復活、浪江を再興 酒文化を全国に発信」『石垣』第42巻第12号、17-19頁。
- ニッポン放送NEWS LINES ホームページ（アクセス日：2024年1月28日）<https://news.1242.com/article/350537>
- ロコバホームページ（アクセス日：2023年11月22日）
<https://musicbird.jp/cfm/biz/loco-lovers/iw-kotobuki/>
- フィリップ・ハーバー、ジョン・ゴントナー、久慈浩介（2015）『カンパイ！世界が恋する日本酒』Wagamama Media (DVD)。

株式会社南部美人インタビュー

令和3年8月30日に、久慈浩介氏（代表取締役社長／五代目蔵元）に対して実施された。尚、インタビュー内容は、Zoomのレコーダーに記録された。時間は、合計1時間23分である。